

アイヌの樹木利用と植物分類学

新田紀敏

はじめに

2020年にウポポイ（民族共生象徴空間）がオープンし、アイヌ文化への関心が高まっているなか、その文化を外部へ伝える事業の受け皿整備も進んでおり、いくつかの企業や団体が文化の担い手でもあるガイドの養成や案内プログラムの提供などを始めています。筆者は2021、22年の2度にわたってアイヌ文化関連企画会社である株式会社 NEPKI から「アイヌ文化に関わりのある自然（樹木）ガイド研修会」の講師を依頼されました。この研修会は自然ガイドコースの設定と説明ガイドの養成事業という位置づけで企画され、参加者はガイドを目指すアイヌの若者や地元の人たち、実習を兼ねた学生と様々でした。アイヌ文化の色濃い白老町と平取町で、一般来訪者向け自然ガイドコースを設定する予定の森林を歩きながら植物の解説をする機会を得ることができ、講師を務めるに留まらずアイヌ語・アイヌ文化に触れる貴重な体験をすることができました。そこで、この研修会を契機に筆者が調べたアイヌ文化・アイヌ語と樹木名に関するエピソードに参加者から聞き取ったアイヌ文化の一端を交えながら紹介し、樹木を通じたアイヌ文化の理解促進の一助としたいと考えました。研修会の主な内容は樹木の同定方法とガイドに役立つような話題の提供だったので、植物分類学に関連した内容が多くなりました。ここでは樹種（群）ごとに提供した話題に文献から調べた内容を加えて分類順に紹介します。

なお、本文中のアイヌ語表記は発音を筆者が理解しうる範囲で片仮名表記したもので、不正確なところがあることはご容赦願いたい。また植物の和名も特に断りなく片仮名で表記していますので、どちらであるかは適宜判断していただきたい。

ラルマニ（イチイ）*Taxus cuspidata* Siebold et Zucc.（イチイ科）

この木は狩に使う弓を作るという重要な用途があります。絵巻物などに小さな弓を構えたアイヌがヒグマに向かってる姿を見ますが、あんな華奢な弓で役に立つのだろうかと思えます（図-1）。イチイの木を見ながら弓にするにはどのくらいの枝が適当かといういかにもアイヌらしい議論があったので聞いていると、揃ってあれだと指差したのは太さ3cm程の枝でした。強さ、しなりなど必用な条件があるのですが、まさに絵で見るようなサイズのものでした。矢尻に塗るトリカブトの毒がポイントであって深く傷つけるような力はいらないのでしょう。

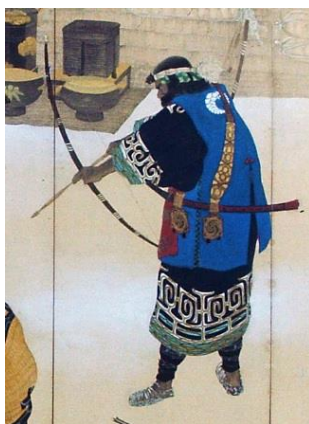


図-1 アイヌが使う弓の例

村瀬義徳「アイヌ熊祭屏風」の一部（市立函館博物館所蔵、利用許可済み）

カリンパニ（サクラ属）*Cerasus* Mill.（バラ科）

アイヌにとって重要な外樹皮カリンパを供給してくれる樹木群です。カリンパは装飾性も良く、強く腐らないので生活用具の材料として様々に使われます。今回の研修コースの中にはエゾヤマザクラ（オオヤマザクラ）*Cerasus sargentii* (Rehder) H. Ohba のほかに、確定はできませんでしたが樹皮の外観からミヤマザクラ *C. maximowiczii* (Rupr.) Kom.と思われるものがありました（写真-1 左）。知里（1953）はこれをレタルカルンパニ（白い花？のサクラ）と区別することもあるように書いていますが、区別しているかとの筆者の問いに、参加者の一人は十分に使えるカリンパが取ればカリンパニと呼ぶと答えていました。実際に鉋で外樹皮の内面を削って艶のあるカリンパを見せてくれたので、呼称はあくまで実用本位のものなのでしょう。



写真-1 サクラ属の樹皮

右：エゾヤマザクラは艶があり、左：ミヤマザクラはくすんで見えるが、内側は同じように光沢がある。（美唄市にて撮影）

サクラ属ではありませんが、シウリザクラの命名経緯が興味深いので紹介します。学名は *Padus ssiori* (F. Schmidt) C. K. Schneid. です。植物の分布境界線のひとつであるシュミット線に名を残すフリードリッヒ・シュミットにより 1868 年に記載されており（当時は *Prunus*）、引用されたタイプ標本*は 1860 年にシュミットらが函館やサハリンで採集したものです（Schmidt 1868）。一方、知里（1953）によるとアイヌ名はシウリで、シウニ（苦い木）からの転化ではないかとされています。このアイヌ名は広く北海道・サハリンで用いられているとのことなのでシュミットが引用したタイプ産地と一致しています。種小名の *ssiori* はシュミットらが採集中にどこかで聞き取ったアイヌ語由来で、記載論文の脚注に *Nach dem Ainonamen des Baums*（原文ドイツ語：樹木のアイヌ名にちなむ。種小名 *ssiori* もそうですが、シュミットらにはアイヌ語の“ウ”が“o”と聞こえたようです。）と書かれています（Schmidt 1868）。牧野（1961）によると和名のシウリザクラも由来はアイヌ名で、アイヌ名が学名・和名に取り入れられて 3 者が一致している希な例となっています。研修会ではこの話がしたくて探したのですが、見つけれなかったのが残念でした。

*タイプ標本：その生物種を定義するための証拠として指定された標本。記載論文とともに種同定の基準となる。

アツニ（オヒョウ）*Ulmus* L., ニペシ（シナノキ属）*Tilia* L.（ニレ科，アオイ科*）

どちらもアイヌにとって繊維を取るために重要な樹木です。オヒョウ *Ulmus laciniata* (Trautv.) Mayr ex Schwapp.（写真-2）は昔あったと伝わっていますが、現在白老や平取にあるかどうかは話題になる程珍しい樹木になって久しいようで、持続可能な利用の難しさが伺われます。若い人はアイヌといえども実際に樹皮を剥いたことがないらしく、参加者からやってみたいとの声がありました。和名のオヒョウはこの木の樹皮を指すアイヌ語のオピウから来ています（知里 1953）。彼らは、シナノキ *Tilia japonica* (Miq.) Simonk. とオオバボダイジュ *T. maximowicziana* Shiras. もほとんど樹皮を剥いたことがなく、シニペシ（シ

ナノキ)・ヤイニペシ(オオバボダイジュ)と呼び分ける繊維の取りやすさを体験的に確かめたいとの意見がありました。残念ながら幼木を含めてオヒョウやシナノキが、今回の研修コース近辺にあるか否かすらわかりませんでした。両種ともアイヌ文化を理解する上で非常に重要で、かつこれからのアイヌにとって需要が高く、文化継承に必要なものなので、是非とも探し出してガイドメニューに入れるべき樹木だと思います。簡単に近づける場所がない場合は、地域内でタネを取って苗を作り、植栽したら良いと思います。

*アオイ科：シナノキの仲間がかつてのシナノキ科から、分子分類により全く違うように感じるアオイ科に統合されている。



写真-2 特徴的なオヒョウの葉
(札幌市で撮影)

スス(ヤナギ属) *Salix* L. (ヤナギ科)

この木はアイヌにとっていくつかの使い道がありますが、なんとと言ってもイナウ(木幣:写真-3)を削るという祭祀上重要な木で、アイヌ語としては例外的にススという属名に当たるものを持っています。ヤナギ類はどれもよく似ているので、どのような観点で材料としてのヤナギを区別しているのか調べた結果を以下に記します。

まず、以下3種は名前があることから他のヤナギからは明確に区別すべき用途があったようです。ただし、アイヌ名はアイヌ語の特性として生物を特定するわけではなく、用途を示して説明的に呼ぶ形をとるため、同じ植物がいくつかの呼称を持っていたり、地域などによっては同じ材料(例:舟材)として使うものが違う植物でも同じ呼称となってしまいます。そのため、呼称と生物が1対1に対応せず混乱が起こりやすくなります。ここでは知里(1953)で示された代表的な呼称と用途にしたがって説明します。



写真-3 地面に立てられ、そのまま根付いた
オノエヤナギの古いイナウ(左)
(2021.9.23 平取町二風谷)

・トイスス(オオバヤナギ) このアイヌ名は木村(1928)によって学名(属名:現在はシノニム*) *Toisusu* として使われました。詳しくはわかりませんが墓に関係するようです(知里 1953)。このヤナギの分類には長年大きな混乱があり、アイヌ語との照合にも多くの疑問はある(本田 1999)のですが、現在はトカチャナギ *Salix cardiophylla* Trautv. et C. A. Mey 1種として大陸のカラフトオオバヤナギと呼ばれたものを含めて同じ種に整理されることが多くなりました(大橋 2016)。分ける場合は変種オオバヤナギ var. *urbaniana* (Seemen) Kudô とされます。

・ウライスス(イヌコリヤナギ) *S. integra* Thumb. 遡上するサケを捕獲するためのウライを作るのに使う(知里 1953)木です。

・チプニスス(バッコヤナギ) *S. caprea* L. 太いもので舟を作った(知里 1953)とのことですが、この点は異論もあるようです(本田 1999)。筆者の個人的な経験としては舟材となりそうなかなかの大木を見たことがあります。ただし低い位置で枝分かれし長い丸太は取れないため、小さな舟になってしまうのではないかと思います。このチプニススの文字通りの意味は「舟材をとるヤナギ」というほどのものなので、ヤナギの大径材に対する呼称と考えられます。前記のオオバヤナギのほか、アイヌ語研究者の

指摘はありませんが、植物研究者の感覚からすると大木となるシロヤナギやケショウヤナギも場合によってはチブニススとなったのではないかと思います。

オノエヤナギ *S. udensis* Trautv. et C.A.Mey. は一名としてイナウニススがあり、主にこの木でイナウを削ったようです(知里 1953)。イナウは大きなもので径 5cm, 長さ 2m ほど必要なので、オノエヤナギはある程度成長が良く、まっすぐに伸びる性質から良い材料となるであろうことは想像できます。現に平取町の二風谷アイヌ文化博物館等がある二風谷コタンに再現されたチセ集落の中には、何箇所もイナウを供えた場所がありますが、その中に 1 本のイナウが挿し木状態で根付き葉を出しているものがあり、それはオノエヤナギでした(写真-3)。しかし、研修会参加者の一人はエゾノカワヤナギ *S. miyabeana* Seemen subsp. *miyabeana* (またはカワヤナギ subsp. *gymnolepis* (H.Lév. et Vaniot) H. Ohashi et Yonek.) と思われる川岸にあるヤナギはイナウの材料を取りやすいと聞いたことがあると話していたことから、低い位置で多幹になりやすい性質を持つため、細くてもよければ効率よく多くの材料を取ることができるのだと思われます。エゾノキヌヤナギは、現在 *S. schwerinii* E.L.Wolf とされますが、Kimura (1937) は *pet-susu* の学名(種小名: 現在はシノニムとされることが多い)を与えています。知里(1953)が収録したアイヌ語の中にペッスス(川・ヤナギ)に該当する名称がないことから考えると、学名に積極的にアイヌ語を取り入れようと考えて調査していた木村の問いに対して、アイヌの案内人が「川にあるヤナギだ」という趣旨の答えをしたというようなことがあったのかもしれませんが。イナウを削る立場の男性参加者に尋ねたところ、イナウの材料として重要なのは十分な太さ、長さともっすぐであり節がないことでした。上記 3 種はどれもイナウの材料が取れそうなので、区別はせずに個体の素性で選んできたのかもしれませんが。

*シノニム: 一般には同義語のことで、分類学では分類の見直し等によって使われなくなった学名を指す。

マタタンブ類(マタタビ属) *Actinidia* Lindl. (マタタビ科)

北海道に自生する 3 種のマタタビ科植物は、アイヌも識別していたことが名前からわかります。しかしアイヌ名と和名ではグループ分けが異なっているのが興味深いところです。アイヌ語ではいずれも果実を指す名称で、クッチ(サルナシ) *Actinidia arguta* (Siebold et Zucc.) Planch. ex Miq., チカプクッチ(ミヤママタタビ) *A. kolomikta* (Maxim. et Rupr.) Maxim., マタタンブ(マタタビ) *A. polygama* (Siebold et Zucc.) Planch. ex Maxim. となっています。チカプクッチはクッチより味が劣るので和名における「イヌ」のようにチカプ(鳥の)という限定詞が付いています。マタタンブもチカプクッチと呼ぶ地方があった(知里 1953)ので、味が劣るとの認識のようです。筆者の感覚ではありますが、味が良く最上のものがクッチ、それに似るがやや味が劣るものがチカプクッチで、この 2 種が同じグループとなり、マタタンブは癖のある味がするので別グループとすることは合理的であるように思います。一方の和名は、丸い実がなるのがサルナシで、やや細長い実がマタタビ、それに似て果実の先が丸いものがミヤママタタビとなっています(写真-4)。グループ分けとしてはミヤママタタビがマタタビ側になります。ちなみに和名のマタタビはアイヌ名のマタタンブ由来です(牧野 1961)。



写真-4 マタタビ類 3 種の果実の比較
左: サルナシ, 中: ミヤママタタビ,
右: マタタビ

アユシニ(タラノキとハリギリ) *Aralia elata* (Miq.) Seem., *Kalopanax septemlobus* (Thunb.) Koidz. (ウコギ科)

タラノキとハリギリはどちらも若い幹や枝に鋭い刺があります(写真-5)。そこからアイヌはどちらもアユシニ(刺が多い木)と呼び名称からは区別ができません。研修会に同行していた札幌大学アイヌ文化教育研究センター長であり、長年二風谷でアイヌとともに生活した経験もある本田優子教授に名前による区別を尋ねてみましたが、名前からどう説明したら良いかわからない、つまり呼称としては全く

同じとのことでした。実際にはこの2種はかなり違った樹木で使い方もいろいろとあった(知里 1953)ので、何らかの区別をしていたと思われます。食料や薬(タラノキ)と臼や舟(ハリギリ)では材料の大きさがかなり違うので、用途に応じた材料名として部分的に呼ぶことで不自由はなかったとも考えられます。薬用のアユシニの根とか臼材のアユシニの幹と言えば誤解はないのでしょうか。魔除けに使うときは刺が鋭ければどちらでもよかったですのでしょうか。今回、平取町二風谷で歩いた研修コースには両種がありました。自然ガイドの際には、同じ名で呼んだのでは同じ植物だと思われるので、どう説明するか工夫が必要でしょうか。例えば山菜のアユシニと木材のアユシニでしょうか。



写真-5 「刺のある木」の比較

左：タラノキ，右：ハリギリ

※ ともに若い枝には同じように鋭い刺がある。

謝辞

最後になりますが、筆者にとって有意義なそして楽しい研修会に参加する機会を与えてくださった株式会社 NEPKI 代表取締役の山田桜子様、札幌大学の本田優子教授、そして筆者にとって初めてだったアイヌとの直接対話でアイヌ文化の一端を教えてくれた研修参加者の皆様に心からお礼申し上げます。

(保護種苗部保護グループ)

引用文献

- 本田優子 (1999) ヤナギに関する一考察—アイヌの丸木舟に用いるヤナギの樹種の同定とその学名について—. 北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要 4: 33-51
- 木村有香 (1928) 楊柳ノ一新屬 Toisusu 及ビソノ分類學上ノ位置. The Botanical Magazine Tokyo 42(497) :288
- Kimura A. (1937) Symbolae Iteologicae IV. Science Reports of the Tohoku Imperial University, Fourth Series, Biology 12: 311-321
- 牧野富太郎 (1961) 牧野新日本植物圖鑑. pp. 1060. 北隆館, 東京
- 大橋広好 (2016) ヤナギ科 SALICACEAE. 大橋広好ほか(編), 改訂新版日本の野生植物 3 pp. 184-208. 平凡社, 東京
- Schmidt F. (1868) Reisen im Amur-Lande und auf der Insel Sachalin. Mémoires de L'Academie Imperiale des Sciences de Saint-Petersbourg. ser. 7. 12(2) : 1-227
- 知里眞志保 (1953) 分類アイヌ語辞典第一巻植物篇. pp.394. 日本常民文化研究所, 東京